

波の花沖から咲きて散りくめり水の春とは風やなるらむ

伊勢

『古今和歌集』「物名」の一首。

「寄せてくる波は、まるで咲いた花が風に吹かれて沖から散って来るよう。春が花を咲かせるように、風が水の春として波の花を咲かせるのかしら」。

沖のほうから波が白い花のように、寄せては散り寄せては散る。波の動きの映像の美しさ。「水の春」という言葉の美しさ。波の動きそのままのリズムの美しさ。

「散りくめり」は「散って来るよう（です）」というほどのニュアンスだろう。聞き手への婉曲表現である「めり」が、やわらかなひびきをもたらしている。

しかもこの歌は「物名」つまり、何かの名を詠み込んだ題詠なのである。ここでは地名「唐崎」。唐崎は琵琶湖沿岸にあり、万葉以来の歌枕の地でもある。上句の自然な言葉運びのなかに、「沖から咲きて」と見事に歌に溶け込

んでいるから驚く。

伊勢は宇多天皇の中宮・温子に出仕して、宇多天皇主催の歌合など宮廷和歌の華やかな舞台で活躍した。出仕した際の父の職が伊勢守であったことから、伊勢と呼ばれる。

やがて天皇の寵愛を受け皇子が生まれるが夭折。しかしさらにのち、均子内親王の夫であった敦慶親王との間に、歌人として活躍する中務が生まれる。

さて、右の歌を読むと思い出すこんな歌もある。

春ごとに流るる川を花と見て折られぬ水に袖や濡れな

む  
『古今和歌集』「春」

年を経て花の鏡となる水は散りかかるをや曇ると言ふ

らむ  
同

二首とも、宇多天皇の御殿・京極院での梅の花見の宴で詠まれた歌という。梅の花びらがいっぱい散った川面を「折られぬ水」と詠む一首目。春ごとの花を映して「花の鏡となる水」と詠む二首目。なんと繊細でゆたかな想像力だろうか。

伊勢は「水の春」の歌人なのである。（小島ゆかり）

